

## 二百年史を目指して

渡 辺 久 雄

神戸女学院百年史編集委員会は、昭和五十一年（一九七六）十月十二日付で『神戸女学院百年史 総説』を刊行し、同五十六年（一九八一）三月十二日付で『神戸女学院百年史 各論』を出版した。こうして百年史が一段落をしたばかりに、早くも『神戸女学院二百年史』を夢みて、神戸女学院史料室は史料の整備と編集事業を開始しようという意気込みなのである。しかしこの二百年史が刊行されるであろう二〇七五年には、現在の教職員も、学生・生徒も、誰ひとり残っていないことが予想される。それにも拘らず何故に急いで準備体制に入ろうとするのであるのか。

『神戸女学院百年史』の場合、昭和四十七年に史料室が設置され、同四十九年に初めて百年史編集委員会が開催されているから、わずか二、四年間で一〇〇年にわたる長い学院の歴史をまとめ上げたかにも見える。しかし実際には百年史のモデルとなり、素材となった五十年史・八十年史が既に存在していたし、宣教師文書や手記などのあったことが編集事業の短縮に大きく役立ったと言えよう。従って、もしこうしたものがなく、一切を一から始めなければならなかったとすれば、わずか四年位の準備期間を以て百年間にわたる通史をまとめることは到底できなかったにちがいない。その点で、すべてを新たな資料とそれによる考察・研究に拠らざるを得なかった各論は、総説より更に数年

おくれて刊行された事実が、この辺の事情を如実に物語っている。

十年史程度の編集であっても、その準備に二、三年を必要とする。まして二百年史編集のためには、今から準備しても決して早すぎるということはない。又百年史編集に当たって、五十年史・八十年史が役立ったことの経験に鑑み、史料室はまず年報(『学院史料』)を出すことから始めることにした。こうしたものの積重ねによって、百二十五年史なり、百五十年史がきつと出来上がるであろうことを考えている。また、積上げ方式を主張する理由の一つとして「世代」の交替のあることをあげたい。昔から一世代を二〇、二五年と考えて来たのはそれなりに根拠があるようである。人びとの集団である学校社会にもそっくり当てはまる。個人の経験や記憶を通して、正確に把握し得る情報の限界は二〇、三〇年程度であり、それ以上の年数にわたる場合は記録によらなければ不正確となる。従って次の二百年史の出来上がる迄に、四、五冊の年史の中継ぎが必要となろう。

積上げ方式主張の第二の理由は、情報氾濫時代といわれる現代への対応の必要からである。何にもまして複写機の普及による情報入手の容易さが、資料を、やがては史料への価値観を著しく低下させるであろうことを極めて恐れているからである。こうした変化の始まる前に、といっても既に始まっているのであるが、既存史料の整理・保管体制を確立しておきたいのである。

このようにして当史料室は、微力ながら一年また一年の積重ねを開始しているのである。息の長い、それでいて急がねばならぬ仕事も多いと考えられるので、今後一層のご理解とご協力をお願いするものである。

最後に当史料室の歴史的なことについて若干ふれておくことにしたい。その一は昭和三十年に刊行された『神戸女学院八十年史』の執筆者であり編集者でもあった、現神戸女学院大学名誉教授の和島芳男博士の収集された史料が、

現在貴重な資産として整理・保管されていることである。当時、大学文学部社会科学科において日本文化史担当であった同教授が執筆・編集した『神戸女学院八十年史』は、首尾一貫している点、簡潔にして要を得ている点で、正に神戸女学院における年史の規範といえよう。

次に当史料室にも前史を含めた経緯がある。即ち、正式に史料室の設置された昭和四十七年（一九七二）に先立つ二年前の昭和四十五年（一九七〇）、アルバイト職員二名の手で実質的な史料整備の仕事が開始されていた。昭和四十七年に初めて「神戸女学院史料室」が正式に発足し、当史料室の責任者としては、西洋史担当の鈴木恒彌教授がこれに当たった。こうしてようやく体制が整い、前途に大きく期待が寄せられたが、不幸にも昭和五十五年夏、鈴木教授の訃に遭ったことは、同教授が史料室の得難い責任者であっただけに残念なことであった。

事実上の史料整備が開始される昭和四十五年（一九七〇）以降において、実施されてきた作業内容の重なるものは次の通りである。即ち、(1)神戸女学院七十五年史に相当する“The History of Kobe College”（英文）・『神戸女学院八十年史』・『神戸女学院百年史』についての人名索引作成。(2)神戸女学院の創立に関わった米国伝道会の宣教師書簡の整備。(3)神戸女学院同窓会誌『めぐみ』についての目次索引カード作成。(4)図書館の所蔵する“Missionary Herald”（1868～1951）の中から、日本関係の記事を抜萃し、それに基づいての地名・人名索引の作成（現在も続行中）。(5)『七一雑報』（明治八～十二年）についての目次索引の作成。（完了して今後は地名・人名索引に着手予定）

現在、史料室運営に関する組織としては、昭和五十六年（一九八二）七月に設置された「神戸女学院史料室運営委員会」が活動している。渡辺久雄顧問（議長）・高道 基教授・三木俊秋教授・山内祥史教授・小松八郎教諭・澤千芙美司書教諭・真多ヨシエ図書館事務長・若山晴子助手が委員会の構成員である。なお岡本道雄学院長・八木一文大学

長・杉瀬 祐中高部長は随時この委員会に参加できることになっている。当運営委員会は、昭和五十六年度は隔月に、同五十七年度は毎月定例に開かれ、史料室運営に関する方針を決定してきた。

史料室運営の仕事の中の重要なことの一つは機関誌の発行であろう。現在の段階では年間一冊の発行を予定しているが、史料室が施設面でも人員面でも充実した時には、季刊誌にまで発展させたい希望を持っている。またその内容は誌名『学院史料』の示すよう、あく迄も史料の紹介(公開)とそれに関する若干の操作を中心とし、それに基づく研究等は大学の研究誌に譲る方針を堅持してゆくこととしたい。

次に史料室の責任者及び実務担当者は

渡辺久雄 昭和四十六年以来、文学部教授・同特任教授を経て現在は学院顧問。専門は歴史地理学。文学博士。

若山晴子 史料室開設当初より学院史編集・史料整備の実務に当たる。現在大学文学部助手で史料室の実務責任者。文学修士。

鈴木 睦 昭和五十五年より史料室の嘱託職員をつとめ、『神戸女学院百年史 各論』の編集に尽力した。文学部総合文化学科卒業。

石川晴子 本学文学部非常勤講師(フランス語)を担当。今秋より「宣教師文書」の取扱いを中心とした史料室業務に、随時協力を得ている。文学部英文学科卒業。